

C'n

vol.31

SCENE
NEWS

CHIBA CITY MUSEUM OF ART



トン族の村の入口に架かる風雨橋

藍と暮らす人々 トン族・ミャオ族・タイ族

太陽と精霊の布

— 中国・東南アジア少数民族の染織

topics

特集：太陽と精霊の布/おわりははじまり
予告：日本の版画・1931-1940 ほか
連載：ボランティア日和/展示室で考える

装うということ

外国へ行ってアジア系の人に出会った時、その人が日本人か異国の人か顔だちや身体つきではなかなか見分けがつかないものです。私の経験では、年をとっている人も若い人も、そして男女を問わず、小ざっぱりして清潔感にあふれた服装をしている人は、遠目にも我が同胞だろうと、およその見当がつくものです。もちろん例外はあって当てが外れることもあります。

身を装うということは、生まれ育った文化そのものを丸ごと表現することになるのでしょうか。自分の素性をさらけ出すことにもつながりそうで、よくよく考えようかつに服も選べなくなりそうです。

さて、この夏の企画展として、「太陽と精霊の布」というメイン・タイトルの下に、中国南部から東南アジア北部に暮らす少数民族の染織品を広く一般の皆様へ展示いたします。ご自身も染織家として活動されているタイ在住の瀧澤久仁子さんの、長年にわたって収集したコレクションからさらに厳選した約230点が展示される会場は、おそらく私たちを未知の文化空間へと誘い、一種不思議な感動を与えてくれるはずです。

トン族を中心としてミャオ族やタイ族などのこれら少数民族は、古代中国の長江流域、呉・越などの地域から南下してきた人々に起源を有しているそうです。地理的に遠くへわたっていますので私たち日本人の装いとは異なる面が大きいのですが、どこかつかつく、親しめる要素にもあふれているのです。

なつかしく思える一つの要因として、これらの人々のアニミズム的な世界観や宗教観があるようです。染めや織りによって浮き上がってくる文様の中に、様々な動物や鳥のイメージが埋め込まれていることに気付かされます。また、渦巻文様や巴文、唐草めいた連続模様、永遠の時の持続への願いや祈りの心が垣間みられるのです。素朴で原始的な感情や思考の文様化は、現代に生きる私たちにも直接、端的に訴えかけ、共感を求めてきます。



トン族の衣装に刺繍された渦巻文 20世紀前期

もう一つの要素としては、サブ・タイトルに「藍と暮らす人々」とあるように、染めの基調を藍の色にしていることです。藍の深みのある青い色合いは、私たち日本人にとっても昔から親しいものでした。そうした藍好きな私たちにとって、彼らが手ずから原料を用意し、染め上げた藍の本来の色の風合いは、とりわけ魅力的で、好ましいものに映るのです。

また、布を竹筒などに巻きつけ、それを圧縮して付けたブリーツの、折目の温かみも印象的です。機械による鋭い皺(ひだ)とはまた違って、おそらくは見た目ばかりでなく着る人の肌にもやさしいブリーツに違いありません。



貴州省 ミャオ族の新年祭(2001年) 撮影：小林 治 提供：ユーラシア旅行社

奥深い山間の、決して豊かとはいえないであろう生活の中で、これほど華やかに、美しく装うことを欲する人々の心根は、はたしていかなるものなのでしょう。装い飾ることがそのまま、神意にかない、家族や共同体の暮らしを守ってくれることにつながるものと、敬虔に信じてのことでしょうか。神や精霊への畏敬の念を忘れて久しい私たちに、これらの染織品が何か根源的な問いかけを仕掛けてくれそうな予感がしています。

話は私事にわたって恐縮ですが、私の住んでいる町に、小さな規模ではありながら極上の美術品を展覧してくれる私立美術館があります。散歩の途中に気軽に立ち寄れるオアシスのような場所なのですが、残念なことに間もなく別の土地に移転するとのニュースに接しました。失うことによってその有りがたさ、貴さを今さらながらに思い知らされています。

千葉市美術館が市民の皆様にとって、そのような愛着をもっていただける存在となっているだろうかと、改めて反省させられているところです。「太陽と精霊の布」展および同時開催の所蔵品による特別企画展「おわりははじまり」は、夏休みに合わせて小・中学生を無料とさせていただきます。お子さんやお孫さんの手を引いて散策がてらお気軽にお出かけ下さいますよう、館員一同心からお待ちしております。 館長 小林 忠



雲南省の棚田(2004年) 撮影：小林 治 提供：ユーラシア旅行社

太陽と精霊の布 - 民族の色と文様

今回の展覧会は、中国南部から東南アジア北部に居住しているトン族、ミャオ族、タイ族の染織品を中心に展示するものです。糸や染料を作るところから、染、織、さらに刺繍、ブリーツ加工と、伝統的にすべての工程を母と娘が手作業で行い、美しい衣装を完成させます。各家庭で自分たちのために作られる、生活そのものの中から生まれた染織品なのですが、実に緻密で洗練された美意識を示していることには驚かされます。

古代長江中下流域に起源が求められるこれらの少数民族は、漢族の南征に対しこれと同化せず、次第に西南地域へ逃れて山深く住むことになったという人々でもあります。外部との接触が希薄な山奥に居住したことで、伝統的な生活文化が今なお生活の中に生きていて、染織品にもその特色が表れています。さらに惹きつけられるのは、その自然環境や生活文化に日本と親しい事象が見いだされることから、日本文化のルーツをこれらの民族の中に見いだそうとする試みとして、「照葉樹林文化論」が提唱されてきたからです。

最も説得力のあるのは食物で、漬物、納豆、なれずし、味噌、こんにゃく、もち米といった、中国北部では食べないか好まれず、しかし日本人にとってはなじみのある食物を、この地域の少数民族たちは日常的に食べています。タイ米といえば細長いばさばした米がまず思い出されるかもしれませんが、タイ北部ではもち米が主食である場合が8割だそうです。ご飯を主食にする民族でも、漢族はご飯のねばねばを好みません。日本人と少数民族の「ねばねば」好きは、やはり無視できない強い絆であるように思います。一部は漢族と同化し、また山で焼畑・狩猟民族となった人々もいますが、過酷な山の急斜面でも、彼らは果てしもない棚田を開きました。どうしてもお米が食べたかった人たちです。

やはり美術館員としては美意識について何かこの「ねばねば」に当たるものはないかと捜してしまいます。トン族とミャオ族が表す文様の中で、最も印象深いのは渦巻文でしょう。渦巻は、線をぐるぐると巻いただけのシンプルな文様ですが、非常に強い印象を与えます。トン族の渦巻文は蛇信仰の表れという説がありますが、実際にははっきりした答えが得られていないようです。

渦巻文様は、人間の生にとって根源的で、ほとんど本能的に心動かされる形なのだろうと思いますし、古代には渦巻文様をよく表していた人種が多いのも事実です。日本では縄文時代の土器に多く渦巻文が表れることが指摘されていますが、そこに何か限定的な民族的つながりを求めてもよいのでしょうか。くさび形の文様など、他の文様もどうも近い存在に思えてなりません。アイヌの衣装文様や技法なども思い起こされます。考古や民俗の立場からはどうかと思いますが、見た目からはそのように捉えられます。

最近教えていただいた野代幸和氏による「土器に施された文様とその意味について(一試案) - 中国西南地域の少数民族衣装等に見られるその文様から - 」(山梨県立考古博物館 山梨県埋蔵文化財センター)では、「(前略)「照葉樹林文化論」に基づく、生活と密接な関係があるものを題材にして表現している中国西南地域に住む少数民族の衣装等に見られる文様が、その考え方や捉え方について日本の縄文土器に施された文様とある程度共通する部分があるように思えてならない。」と述べられ、その文様の比較を行っています。

インドのアッサムから中国南部、日本の西南部へとつながる



ミャオ族の衣装に表された渦巻やくさび形の文様など
20世紀前期

照葉樹林帯の基底文化の流れは、ただ偶発的に同じ自然環境から同じ文化が生まれたのでしょうか、それとも人と人がどこかでつながって考えられるのでしょうか。歴史、民族、考古、人類、言語学など多岐の分野から興味深い指摘もあるようですが、結論はまだ出ていません。

彼らの衣装に表された文様や色は、一見日本の持っている感覚と違うようでいて、どこか共通した美意識が垣間見えることも事実です。大まかな思いつきからそれを挙げてみると、1.藍を好む(華やかな色以外の色を重視する)、2.微妙な色の差に敏感である、3.モチーフを本物らしく表そうという感覚に薄い、となるでしょう。これはやはり中国の中心民族である漢族の好みとは少し違っているようです。日本人も、これらの少数民族たちも、全体的に圧迫感のない、快い色と形に気を取られて、何かを本物らしい形と色にすることは二の次になる傾向の民族です。

例えば色について考えてみると、伝統的な色の名前は漢族も日本人も材質や動植物の名がもとになっているのは共通しているのですが、漢族はより実証的で、実在の何かと色が基本的に対応するという捉え方が中心であるのに対して、日本の色名は「こんな感じ」「~というイメージ」と付けたいような観念的なものも多いようです。惹かれる色であれば「梅鼠」(うめねず)などという実体のない色名をためらいもなく誕生させてしまいます。色の濃淡や、くすみ方で色を区別することも多いことに気がきます。

現在稲の起源地は長江中下流域とする説が強く、楚(~BC223)の国に属して水稻の栽培を行っていたとされるミャオ族が稲を日本に伝えたのだという説も出てきています。古代中国では、太陽や鳥を信仰するアニミズム的な要素が強く、それは日本にも伝えられていて、神事にかかわる装束やしつらえなどに現在もよく残されています。同じように太陽や鳥への信仰が、ミャオ族や「我ら越王の子孫」というトン族の衣装文様の中に、やはり2000年以上の時を過ぎても表れているのです。

いつかどこかで日本人とこれら少数民族の祖先は隣人であったのでしょうか。美術の中では結局「何か近い気がする」というところから一歩も出ることはできないのかもしれませんが、それが肯定されるとすれば、想像は膨らみます。これら民族の染織について総合的で大規模な展覧会が行われるのはこれが初めてですが、展示作品を通して遙かなる祖先の精神世界を感じること、一層親しい共感をいただけるような気がしています。

(学芸員 田辺昌子)

藍と暮らす人々 トン族・ミャオ族・タイ族
太陽と精霊の布 中国・東南アジア少数民族の染織

2004(平成16)年7月13日(火) - 8月29日(日)
10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日

【入館料】 一般 800(640)円

大学・高校生 560(450)円

中・小学生 無料

()内は団体30人以上の料金

【主催】 千葉市美術館・東京新聞

【助成】 独立行政法人 国際交流基金

【会期中の関連イベント】

ギャラリートーク

毎週水曜日と金曜日(14時より)

8階展示室入口にお集まりください。

ワークショップ「藍の生葉染」

藍の生葉で布を染めるワークショップです。

日時：8月8日(日)10時から16時の間随時(参加自由)

会場：1階エントランス

さや堂コンサートのお知らせ
「タイ伝統楽器による音と舞」

- ヒマラヤの峰峰から流れ出る一滴の水はやがて大河となって地を潤し、生き物を宿します。アジアの森羅万象の世界を二胡と笛の音が清流のようにある時は瀑布のごとき響きをもってさや堂に満ち、たおやかに舞う精霊を誘い出します。

企画協力・衣装製作 瀧澤久仁子

演奏：Thitipol Kanteewong (ティティボン カンティーウオン)

舞踊：Waewdao Sirisook (ウエウダオ シリスーク)

日時：第1回 7月30日(金)18時より

第2回 8月1日(日)14時より

* 各回とも定員150名先着順

* 「太陽と精霊の布」展チケット(お一人様1枚)、または友の会会員証をご持参ください。 助成：野村国際文化財団



ボランティア日和

episode 4

いつも元気な大橋さんです。
教育普及担当の学芸員はこの文章を読んで思わずホロリでした。

きょうは学校向け鑑賞教育の話をしよう。

受け持つことになったのは小学6年生12人。展覧会は、「ピカソ、マティスと20世紀の画家たち」と「勅使河原蒼風とその周辺」。持ち時間15分を有効に使って、子どもたちを絵好きにし、美術館を親しいものにしなければならない。私のリード次第では、反対に一生美術を嫌いにしてしまうかもしれない。とんでもないことになったものだ。何をどう話したらよいか。子どもたちはどうとらえてくれるか。

ボランティアへの期待ははっきりしている。大人向けのトークではない、美術史的説明はいらない、絵そのものをみて楽しむことを知らせるのだ。わたしはNHKのTV番組・課外授業「ようこそ先輩」のような場面を思い描きたかったが、こちらの実力の程度にもよる。いいたいことはたくさんあっても時間は限られている。さんざん悩んだあげく、言うことはこれだけと伝えたい思いを胸に彼らを迎えることにした。

思いは3つ。一つは、美術館を好きになってもらうこと、魔法にかけてでも。二つ目は、絵を見て、おもしろそうだと感じてもらうこと。今はそうでなくても、自分の可能性とか予感を持ち帰り、大人になってから思い出してもらえばいい。しかし、感じてもらえるか。三つ目は、今日の体験を家族に話してもらうこと。君が絵を好きになったといったら、両親はきっと喜ぶよ。キーワードは「何でも見てやろう」と「絵を見るときは自由を楽しむこと」だ。

そして・・・案ずるより産むは易し。心配していた自由鑑賞課題、「心を動かした絵」という難問には、その絵を早々と見つけ、全員が感想を書いた。大人とは違うところに目を向ける。ともだちの感受性に触発され合う。私は安心と同時にうれしくなった・・・。

このような顛末で、初めての鑑賞教育のお手伝いは終わったが、好奇心に満ちたまっすぐな目と、蒼風の《無》をみて喚声を上げた豊かな感性が忘れられない。

美術館ボランティア 大橋正弘



「ピカソ、マティスと20世紀の画家たち」展会場にて

おわりははじまり - 子どもと美術館

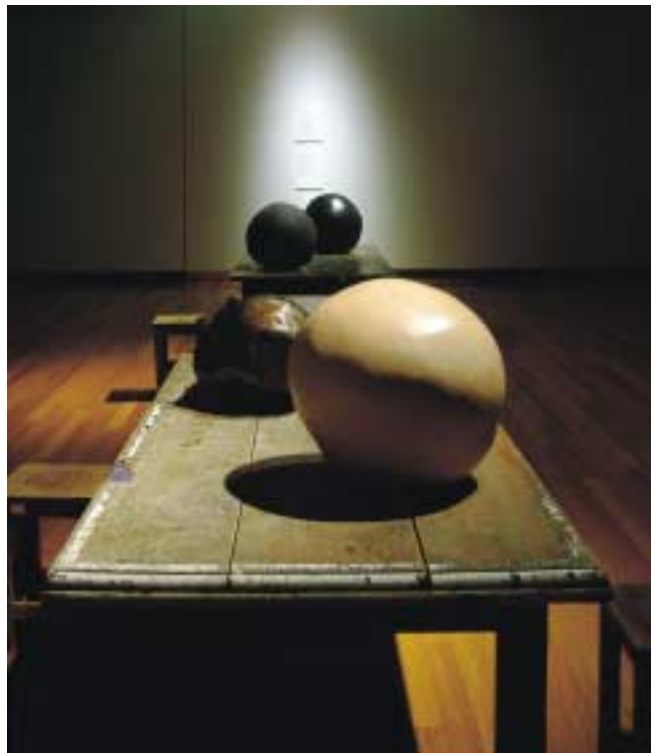
「おわりははじまり」は、「太陽と精霊の布」にあわせて企画された展覧会で、これらの会期をとおして、美術館全体を楽しむための様々なプログラムを用意しています。夏休みということもあり、小中学生をはじめ、あまり美術館になじみのない若い来館者を主な対象とする企画です。

小中学生のための展覧会をつくるのは、実はとても難しいことかもしれません。私は、市美術館が収集してきた数々の作品とこれまでの美術館活動を大切に思っていますし、子どもたちの作品へのまなざしが、たいへん鋭いものであることも、鑑賞教育活動を通して知っています。そんな両者の出会いを設定する仕事は、なかなか責任重大といえるでしょう。美術館の教育普及に対する姿勢は、館の事情により様々ですが、当館では、制作よりも鑑賞に重点を置いてきました。「よくみること」は、若い来館者に対して美術館が用意できる出発点であり、その先は、美術館の外へと広がってゆきます。純粋な楽しみ以外に、もしも美術館に何か積極的な教育的意義を求めるのであれば、よくみること、自分がみているものについて考えること、そして、それを他の人と分かちあうこと（あるいは、分かちあえないことに気付くこと）が挙げられるのではないのでしょうか。一方で、10年後、20年後の市美術館のために、子どもの頃から美術館と作品に親しんでもらいたい、もっと興味をもってもらいたい、ひいては、その人の生活における楽しみの1つに加えられるたい。これは、美術館の切実な願いでもあります。

子どもにとって身近なテーマ設定も、楽しいイベントも、美術や美術館に興味をもってもらうきっかけづくりに過ぎません。今回、展覧会のテキストとして、中学生のためのセルフガイド(6つのおはなし)を用意しますが、実はこれも善し悪しといえます。テーマ説明のないテーマ展示を理解するのはなかなか難しいとはいえ、テキストに頼る作品鑑賞ほどつまらないものはありません。それに、小学生以下の子どもたちは、テキストなどなくても自分なりの楽しみ方を見つけ、こちらの用意したテーマにはお構いなく、作品との驚きの出会いを果たし、様々なものが並んでいる空間を彼らなりのやり方で真剣に満喫することができるでしょう。むしろ、テキストが気になるのは、おとなになりかけた子どもや、おとなのほうかもしれません。でも、それが悪いわけではないと思います。必要なものは人によって異なりますし、それらのテキストは、展示や作品への興味が深まればと思って作られるものです。目の前に作品があるのですから、要らない人は読まなければいいのです。

「小中学生のための展覧会」の望ましいあり方について、考えなければならぬことはたくさんあります。その中には、そもそも、「小中学生を対象を特化した展覧会が必要なのか」という問いもあるでしょう。今はむしろ、対象を特化するのではなく、1つの展覧会について様々な開き方が必要との声もあります。子どもたちの日常に近づくことも必要ですが、同時に、美術館や美術作品が、彼らにとってまだまだ非日常のものであるならば、それを逆手にとって、新しいキラキラするものになりたい。見馴れている世界を見せられても、おもしろくも何ともないでしょうから。

小学生に有名な作家の作品をみせて、彼らに負けない芸術家になってほしいと思うのでしょうか。情操教育も、図画工作の作



西村 陽平《穏やかな癒し》1992年 千葉市美術館蔵

品づくりの参考も、自己表現力を豊かにすることも、それぞれ大切なことですが、それらは学校が考える領分といえるでしょう。それでは、美術館には何ができるでしょうか。みることのおもしろさ、伝達表現の多様性、共感する気持ちだけでなく、自分とは異なるものの存在に気づき、その新しい目でもう一度、自分の身の回りの世界、友だちや日常のこまごまとした情景を見てほしい、と思います。きっかけを得て、関心をもって見れば、今まで見えなかったものが見えてくる。これはなんだろう、これもありが、と思う気持ち（他者への関心）が育ち、もう少しだけ想像する力がもてれば、世の中のやりきれない事件も少しは減るかもしれません。もっともそれは、美術のもつ副次的な力ではありますが。

「おわりははじまり」は、小中学生のことを考えながら準備を進めてきた展覧会ですが、子どももおとなも共に、そして、それぞれのやり方で、楽しんでいただきたいと思っています。

(学芸員 山根佳奈)

おわりははじまり 円をめぐる6つのおはなし

2004(平成16)年7月17日(土) - 8月22日(日)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日

【入館料】 一般 200(160)円

大学・高校生 150(120)円

中・小学生 無料

()内は団体30人以上の料金

*「太陽と精霊の布」展チケットをお持ちの方は無料でご覧になれます。

日本の版画・1931-1940・棟方志功登場

1920年代に版画誌や技法書、展覧会などを介して作り手を増やし、全国に「版画熱」を波及させた日本の版画は、1930年代、戦争への傾斜とともにその様相を変えてゆきました。版画ブームの余韻も未だ濃く、ついに海外での展覧会を実現させた華やかな30年代の前半から、版画誌がひとつひとつ姿を消し、作家たちの多くが彫刻刀を手放した後半へと、わずかに10年の間に状況は一変したのです。

そうしたなかで、時代を超えて鮮烈な輪郭を結ぶ何人かのスターが現れました。例えばそれは、幻想的な物語絵を紡いだ谷中安規であり、痛々しいほどに鋭敏な感性で都市を刻んだ藤牧義夫でした。そして版木に潜む魂を抉り出すような作で、衝撃的なデビューを果たしたのがかの棟方志功でした。また美しい版画本や詩画集を世に問い、時代へのささやかな抵抗を試みた出版人たち 版画荘の平井博やアオイ書房の志茂太郎らの存在も忘れてはなりません。

本展では、約300点の作品を集めて1931(昭和6)年から1940(昭和15)年の日本版画を概観し、版画にとってこの時代がいかなるものであったかを検証します。作家たちの迷いや揺れをも含め、今日の私たちに示唆するものは大きいと考えます。なおこの展覧会は、1997年以来千葉市美術館で開催しておりますシリーズ展「日本の版画」の第四弾でもあります。

(学芸員 西山純子)



川西英《舞踏》1937年 千葉市美術館蔵

主な出品作家

畦地梅太郎/石渡江逸/織田一磨/小野忠重/恩地孝四郎/川上澄生/川西英/北脇昇/河野鷹思/駒井哲郎/齋藤清/ポール・ジャクレ /谷中安規/徳力富吉郎/平塚運一/藤牧義夫/ワルワラ・ブブノワ/前川千帆/棟方志功/安井曾太郎ほか



棟方志功《勝鬘譜善知鳥版画曼荼羅》1938年 青森県蔵

日本の版画・1931-1940・棟方志功登場

2004年(平成16)8月31日(火) - 10月3日(日)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日 9月20日(月・祝)は開館、翌21日(火)休館

【入館料】 一般 800(640)円

大学・高校生 560(450)円

中・小学生 240(200)円

()内は前売および団体30人以上の料金



棟方志功《二菩薩釈迦十大弟子》1939年 千葉市美術館蔵

伝説の浮世絵開祖 岩佐又兵衛

岩佐又兵衛勝以(1578~1650)は、江戸時代の初めに、京都、福井、江戸の三都で活躍した絵師です。父は信長に反旗を翻して一族の大虐殺を招いたあの戦国の武将、荒木村重。時に二歳で命を救われた又兵衛は、その後京都で絵師となり、四十歳の頃福井へ、さらに六十歳の頃には江戸へ招かれて活躍、七十三才でその波乱に富んだ生涯をとじました。

世に「浮世又兵衛」と呼ばれて知られ、独特の画風で一世を風靡し、後続の画家に大きな影響を与えた又兵衛は、のちに「浮世絵の開祖」であるとして伝説的な存在となりました。かつて江戸時代初期の風俗画は、ほとんど「又兵衛(あるいは又平)」の作と名付けられていたのもその一つの現れです。

しかし現在では、明治後期以降この伝説の画人の実像を求めて巻き起こったいわゆる「又兵衛論争」とその後の顛末でさえも、またひとつの伝説のように語られがちです。新聞紙上まで賑わす論争が繰り広げられたり、デパートで開催された絵巻の展覧会に大行列がでたりといった、かつての熱気が信じられないほど、残念ながら一般の知名度も低くなっているのが又兵衛をめぐる現況といえましょう。

千葉市美術館では、開館以来、江戸時代絵画、特に浮世絵派の収集と紹介を活動の一つの柱として力を注いでまいりました。本展は、その元祖とされ江戸時代以来それほどまでに大きな存在であった「浮世又兵衛」とは何だったのか、岩佐又兵衛の功績について伝説化の様相も視野に入れた観点から取り上げるものです。かつて多くの人々を圧倒してきた独特の人物表現の魅力や、現在に至るまでの作品を取り巻く状況にも思いをめぐらしていただけることを願い、構成いたします。関東圏においては約30年ぶりに岩佐又兵衛の作品を概観する展覧会となる予定です。

特に、全長各巻13メートル以上、全12巻から15巻にもおよんで、緻密かつ濃彩で目もくらむほど豪華絢爛な画面が延々と繰り広げられる、古浄瑠璃に題材をとった絵巻群は、近年新発見が相次いだ「堀江物語絵巻」(残欠本)をはじめとして、現在知られている主要作の全てが展示される予定です。

(学芸員 松尾知子)

伝説の浮世絵開祖 岩佐又兵衛

2004年(平成16)10月9日(土)-11月23日(火)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日 10月11日(月・祝)は開館、翌12日(火)休館

【入館料】 一般 800(640)円

大学・高校生 560(450)円

中・小学生 240(200)円

()内は前売および団体30人以上の料金

* 10月9日(土)~11日(月・祝)は中・小学生無料

* 10月16日(土)、17日(日)は市民の日の無料開放日

岩佐又兵衛《伊勢物語・梓弓圖》
江戸時代初期 文化庁蔵



岩佐又兵衛《堀江物語絵巻》
江戸時代初期 個人蔵



モノクローム絵画の魅力 桑山忠明・村上友晴を中心に



桑山忠明《Silver》
1974年 千葉市美術館蔵

モノクローム絵画。単一の色彩が塗られているだけで何も描かれていない極めてシンプルな絵画です。一見すると無表情なモノクローム絵画は、実は非常に繊細かつ静謐で、独特の美しさこそなえています。本展では、千葉市美術館の所蔵品から桑山忠明と村上友晴を中心に作品を選りすぐり、作家毎に多彩で豊かな表情を見せるモノクローム絵画の魅力を探ります。

2004年(平成16)9月7日(火) - 11月23日(火)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日 9月20日(月・祝)は開館、翌21日(火)休館

10月11日(月・祝)は開館、翌12日(火)休館

【入館料】 一般 200(160)円

大学・高校生 150(120)円

中・小学生 100(80)円

()内は団体30人以上の料金

* 「日本の版画・1931-1940」(~10月3日まで)、

「岩佐又兵衛」(10月9日~11月23日)展チケットをお持ち

の方は期間中のみ無料。

展示室で考える

展覧会を伝えるもの

皆さんは展覧会の情報をどのように得ているでしょうか？美術館ではいくつかの方法で情報を発信しています。インターネットや新聞広告などがありますが、その中でも最も重要なものにポスター・チラシがあります。これらのポスター・チラシは、他の美術館や大学などに配布しています。千葉市美術館にも他館からたくさんのポスター・チラシが送られてきます。すべてのポスターを貼りチラシを置くということはスペースの都合上できませんので、展覧会の趣旨などをみて、貼るものや置くものを選びます。多くの場合ポスターとチラシのデザインは同じ形をとっています。今回の「太陽と精霊の布」では、文字の組み方に違いはあるものの基本的なデザインは同じです。

私は何度か展覧会のポスター・チラシを作るという仕事をしてきましたが、そのデザインには、展覧会の趣旨が伝わるのが最も大切です。最低限の情報、たとえば、展覧会名や期日などが明記されていなければなりません。そして、展覧会の雰囲気に合わせてものになっていなければいけません。初めはとにかくカッコいいものを！とだけ考えていました。しかし、すこし頭を冷やして考えてみると、カッコよさの中にも宣伝物としての強いメッセージが込められていなければならないことに気づかされます。美術館のポスターなどが貼ってあるスペースを歩いているときや、駅の構内などでいかに人の目に留まるかが大切なのです。人の目に留まるようにする方法はいくつか考えられるでしょう。目に入りやすい色や写真を選ぶことなどが考えられます。

また、「太陽と精霊の布」のように初めからポスターで使えるように作品を配置して写真を撮影することもあります。文字の色も勿論ですが、大きさも大切です。でもやはり、とにかく目に留まればよいという考えを持ってしまうと、美術館としてはふさわしくないポスター・チラシが出来てしまいます。信号機の色が赤なのは最も人間の目に入りやすいからと言われていますが、それをそのままポスターにしてしまうと、下品な色になるのではないのでしょうか。また、文字と絵のバランスも考えずに大きい文字だけを並べてしまえば、せっかく一緒に写っている作品も台無しになってしまいます。作品の写真と文字のバランス、色などを上手に配置したときに良いポスター・チラシが出来ると思います。一言で言ってしまうと簡単なことですがこれがとても難しいことなのです。

様々な要素を考えてポスター・チラシは作られています。良いポスターデザインだなと思って行くと展覧会もなかなかよかった、ということも多くあるように思います。普段何気なく目にしているポスターやチラシを一度じっくりと眺めてみてください。そこには、文字の情報以上の美術館からのメッセージが込められているはずです。(ko)

連続講座のお知らせ

千葉市が今まで収集した美術品は、企画展や所蔵作品展でテーマを決めて公開していますが、コレクションされた美術品が美術史の中でどのように位置づけられるのかご存じでしょうか？

千葉市美術館では、今年度からコレクションを理解していただくための市民美術講座をスタートいたしました。作品のスライドを映しながら、わかりやすく解説いたします。ふるってご参加下さい。

第4回 8月21日(土)午後2時より

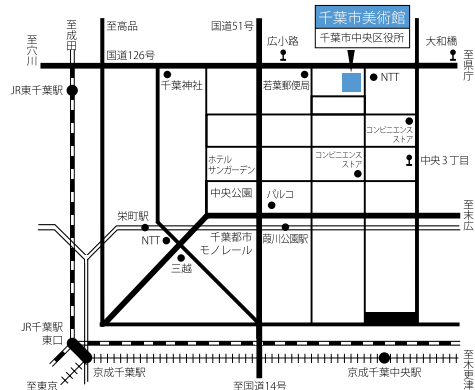
「狩野派と文人画」

講師:小林 忠(千葉市美術館館長)

第5回 9月18日(土)午後2時より

「蕭白・蘆雪・若冲」

講師:伊藤紫織(千葉市美術館学芸員)



JR千葉駅東口より徒歩約15分 / 千葉都市モノレール興行前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分 / バスのりば より大学病院行、南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩2分 / JR千葉駅へは東京駅地下ホームから総武線快速千葉方面行で約42分
京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
東京方面から車では京葉道路・東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ貝塚ICで出て国道51号を千葉市街方面へ約3km 広小路交差点近く地下に駐車場有り



千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

【編集・発行】 千葉市美術館 〒260-8733 千葉県千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chiba 260-8733 Japan

【発行日】 2004年7月22日

【印刷】 株式会社プリンテックメディア